

ジャガイモクロバネキノコバエ

ジャガイモクロバネキノコバエ（学名：*Pnyxia scabiei*）は、国内ではばれいしよの害虫として知られているが、平成15年に北海道でゆりとねぎの新害虫として報告されて以降、県内でも平成22年9月にヒメサユリへの寄生が確認されたことから、特殊報が発表されている。

直近では、平成29年6月に南信地域の露地栽培、早春播き作型の根深ねぎ栽培ほ場において、本種による被害が確認されている。なお、本種は、埼玉県を中心にねぎで発生報告のあるネギネクロバネキノコバエ（学名：*Bradsyia* sp.）とは完全に別種である。

被害の様子

- (1) ねぎでは、被害被害を受けたほ場は、下葉あるいは株全体の葉が退色、黄化した生育不良株がみられる。一見すると黒腐菌核病の被害、ロビンネダニの被害、排水不良による湿害と酷似する。（図1）



(図1) 発生ほ場の様子



(図2) 腐敗した根部



(図3) 根のつけ根に寄生した幼虫

形態と生態

- (1) 雌成虫は無翅で体長2.2mm程度、雄成虫は体長約1.5mm、翅は短く尾端に達しない。体は黒褐色、あごひげが1節からなるのが特徴である。（図4）
- (2) 老熟幼虫は体長約3.5mmで、頭部が黒色で硬化しているが、腹部は柔らかく半透明で脚がない。幼虫や蛹の形態はチビクロバネキノコバエとよく似ている。（図3）
- (3) 成虫は雌雄いずれも飛翔せず、地表面をすばやく歩き回る。25℃における雌成虫の寿命は4日、雄成虫は5日、卵期間3.1日、幼虫期間4.5日、蛹期間3.2日との報告がある。



(図4) 雄成虫(左)と雌成虫(右) 旧上小(現上田) 農業改良普及センター提供

識別のポイント

- (1) 埼玉県を中心に発生報告のあるネギネクロバネキノコバエについては、葉鞘基部、茎盤に寄生が集中(外部に留まる)する傾向があるが、本種は根のつけ根の被害が中心となる。
- (2) ねぎを加害するハエ目にはハナバエ科、イエバエ科、ショウジョウバエ科、ハモグリバエ科があるが、これらの幼虫は、黒色の頭蓋を持たないためクロバネキノコバエ科との区別ができる。

発生条件

- (1) クロバネキノコバエ科は一般に、水はけの良いほ場での発生は少なく、転換畑や粘土質で排水不良ぎみのほ場で発生が多い。
- (2) 幼虫の餌となる未分解有機物の多量投入や必要量以上の堆肥投入により多発するとの報告がある。

防除の方法

- (1) 発生ほ場では被害残渣を取り除き、発生源を残さないようにする。なお、収穫残渣をすき込む場合は、石灰窒素施用等を利用し腐熟促進を図る。
- (2) やや湿気が多い土壌を好むので、土壌が過湿にならないよう注意し明渠の設置等、排水対策に努める。
- (3) 幼虫は未分解有機物等を餌とするため、堆肥は完熟堆肥を用い、必要以上の多量施用を避ける。
- (4) 連作を避ける。
- (5) 薬剤防除を実施する場合は、適用作物、使用時期、使用方法等を必ず確認する。

疑わしい症状を見つけたら、最寄りの農業改良普及センター又は病害虫防除所までご連絡ください。

長野県病害虫防除所 (東北信)TEL026-248-6471 (中南信)TEL0263-53-5642

発行 長野県病害虫防除所 平成30年3月9日作成